

藤村と性科学

— ハヴェロック・エリス『男性と女性』との関連をめぐって —

瓜 生 清

国際共生教育講座

(平成十一年九月六日受理)

はじめに

『春』(緑蔭叢書第二篇、明41・10)『家』(緑蔭叢書第三篇、明44・11)等の自伝的小説が、その主題の核心部分に島崎家に伝承された血統の問題を据え、暗鬱な「キタ・セクスアリス」を追究していることは周知のことである。年来、藤村研究において、頹廢した家系の問題、遺伝的な血の恐怖に収斂させる論究が積み重ねられて来たのは、故なしとしい。このような研究動向の中で藤村文学の進展を見通して独創的なのは、青年期の藤村の最大のドラマが、甘美な恋愛に陶醉する一方で、妄動する愛欲が行き着く破滅に戦慄する青春の二重構造であると分析し、自己の根源にある宿命的な血統の問題を探索する小説『家』を書かなければならない必然的道程について論じた三好行雄氏の『島崎藤村論』(筑摩書房 昭59・1)であろう。三好氏のひそみにならうまでもなく、初期詩文以降、「性」の問題が藤村文学の基底を貫流する重大な創作モメントになっていたことは、例証に事欠かないのである。

「性」への牽引と違和に苦しんだ藤村は、この二律背反的葛藤にどのように対処しようとしたのであろうか。先走った言い方になるが、このような自縄自縛的難題を解決しなければならなかった藤村は、十九世紀の西洋に勃興した性科学理論に関心を醸成する内的必然性があったことになるであろう。従来、藤村とイギリスの性科学者ハヴェロック・エリスが一八九四年に刊行した『男性と女性』との関係については、越智治雄・瀬沼茂樹^(注)西氏が断片的に言及するに止まっている。以下、藤村とエリスの関係について、問題の所在を確認するための予備的な考察を行ってみたい。

(一)

四半世紀に亙る文壇の僚友藤村に言及した田山花袋の文学的回想録に『近代の小説』(近代文明社 大12・2)がある。その一節で、「島崎君ぐらゐる性欲に苦しんだ作家はないと言って好いだらうね」と言及したこと

は広く知られていよう。この評言は、性愛の陥穽から身を起こした小説『新生』(春陽堂 大8・1、12)の作者であることを強く念頭に置いた見解であり、しかも花袋一流の人間解釈に強引に引き寄せた断定調のきらいなしとしない。花袋の論評は、『若菜集』(春陽堂 明30・8)から『新生』までの主要な文業に及んでいるが、その論法は、藤村の文学・思想の変遷を考慮に入れず、終始生理的メカニズムの観点から裁断的批評を行使している。藤村が花袋の強引な立論に承服できなかったのも当然であつたろう。『近代の小説』を寄贈された藤村は、大正十二年四月十四日付花袋宛書簡において、以下のような読後感を述べているからである。「人間の性欲に重きを置いて、そこから種々な作家を批評したあたりは殊に面白く拝見しました。今の小生は性欲といふよりもむしろ性に重きを置いて居ます。その点が大兄と小生との相違かなど、思ひました。」大正十二年と言えば、女性の解放の一助たらんとして旗揚げした雑誌「処女地」(大11・4・12・1)の同人加藤静子との交情が濃やかになった時期であり、藤村は、翌大正十三年四月二十七日には静子に結婚の意を告げることになる。『新生』刊行後の藤村が、当時の女性解放思想に影響を与えたエレン・ケイの著作に注目し、論議の高まりを見せた両性問題について「男女相互の性的及び社会的関係」(「四つの問題」、『東京朝日新聞』大14・1・22・27)から考察しようとしていた人であつたことは、花袋の関心の埒外に置かれていたのである。

エッセイ「四つの問題」で「社会組織の最も深い根底を『性』にありと見たイブセン」に多大な関心を示した藤村が、大正十四年九月二十一日付の加藤静子宛書簡において、「今日は丸善からエリスの性の心理が四巻も届きました。」と告げているのは頗る興味深い。「エリスの性の心理」とは、近代の性科学を代表する研究者として知られているハヴェ

ロック・エリスの『性の心理学的研究』全六巻のことであらう。『藤村全集別巻』(筑摩書房 昭46・5)の「蔵書目録」によると、一九二五年版の『性の心理学的研究』六巻が架蔵されているからである。そして、島崎静子の『藤村の思い出』(中央公論社 昭25・5)によると、藤村が静子の読書指導にエリスの論文を選定して読ませたことがあったと伝えている。エリスについての関心が一過性のものではなく、その後も持続していたことを具体的に示す挿話である。

管見の範囲であることを断らなければならないが、前記の静子宛書簡は、藤村がエリスの『性の心理学的研究』に直接言及した唯一の資料である。『藤村全集』の「蔵書目録」は、解題によると「昭和十八年八月十二日、藤村死去に際し、蔵書目録を作成する意図を以て、日本ペンクラブ書記局関係者が書き留めたカードをもとに作成したものである。」藤村の蔵書は、大正二年の渡欧に際して多くが散逸させられている。この「蔵書目録」では、外遊前の読書傾向を正確に窺い知ることが出来ない。加藤静子宛書簡に従うならば、エリスの『性の心理学的研究』と藤村の関係は、大正期の女性解放思想に関心が向けられた時期の問題として考察するのが穩当に思われる。他の近代の作家に比して、藤村が『性の心理学的研究』に出会ったのはかなり遅かったことになる。例えば、すでに夏目漱石が明治四二年に『性の心理学的研究』を披見していた例もある。その他、有島武郎が大正五年、『或る女のグリンプス』の改稿に際して、エリスの同書から示唆を得たケースは余りにも有名である。明治四十年代から大正の初頭には、エリスの『性の心理学的研究』は近代の作家の視野に入っていたのである。

しかし、藤村は大正十四年九月に『性の心理学的研究』を購入するまで、エリスの性科学理論と無縁であつた訳ではない。このことを裏付け

る重要資料に、藤村と親交の厚かった木村莊太の『家』に就ての印象と感想」(『新思潮』明43・9)がある。署名は末尾に「(太)」と記されているのだが、筆名・内容から第二次「新思潮」同人の木村莊太が書いたものに間違いない。周知のように、小説『家』が上・下二巻の大冊として完成する間に、藤村は明治四十三年八月六日、後半生を左右する妻冬子の急死という不慮の出来事に遭遇する。発表機関も読売新聞紙上から「中央公論」へ変更された経緯もあり、刊行にこぎ着けるまでの成立背景は複雑な様相を呈している。木村の文章は、豊富な直話の紹介、興味深い目撃談などに富み、成立論的にアプローチする場合看過できない。これによると、木村は小説『家』が読売新聞に連載される直前の明治四十二年十二月に藤村宅を訪ねている。その時、机上にエリスの『男性と女性』が置かれていたという。以下、引用する本文に付した傍線・波線は稿者による。

いよく／＼島崎先生が長編の創作に手を着けられると伝えられて、

読売紙上へあの『長旅に上るやうな感じを懐いて紙に臨む』といふ意味の予告が始めた時だから、去年丁度暮近い頃だったらう。ある日私は新片町へお訪ねした。先生はまだ筆を下してはをられなかった。いつも本といつては月々の雑誌の外何にも載つてゐるのを見たことの無い机の上には、読みさしの『クロエツェル、ソナタ』とハベロツク、エリスのマン、エンド、ウーマンが置かれてあつた。

浅草新片町時代の藤村に最も私淑し、親密な交際を許された人物の回想である。木村の回想は、小説が連載され始める直前の訪問から約十ヶ月後に発表された文章であり、記憶が風化し不鮮明になっていたとは考えにくい。確度の高い証言と見なしてよいと思う。エリスの『男性と女性』を読んでいたことは確定的であろう。念のため、木村の文章に若干

の注記を加えておく。木村は、藤村を訪問した時期について、小説『家の』「予告が始め」た「暮近い頃」であつたと言っている。『家』奥書「(定本版藤村文庫)第五篇 昭12・10」を参照すると、この予告文は、読売新聞社側が明治四十三年に連載予定の新作小説を宣伝する目的で発表したものである。読売の文芸部記者岡村千秋に対して、新作の抱負を「前途を思ふと何となく長い旅に出るやうな気がします」と語った直話を取り込まれ、明治四十二年十二月十七日から十九日にかけて「新春小説予告」、続いて二十一日から三十一日にかけて「新年の本紙」の見出しで、繰りかえし連日掲載されている。野心的な大作に取りかかろうとする藤村の緊張感が伝わってくる談話である。この間の経緯を回想した木村の文章は、予告文に使われた談話を忠実に再現したものになっていない。しかし、内容的に大差はない。以上のことから、木村が藤村を訪問したのは、最初の予告文が発表された十二月十七日から十九日までのことになろう。

木村が訪ねた時、机上にエリスの本と一緒にトルストイの『クロイツェル・ソナタ』(一八九〇)が読みさしたまま置かれていたという事実が、当然『男性と女性』を繙読する理由と無関係ではあるまい。この時期の藤村は、『アンナ・カレーニナ』(一八七三―七六)等の前半生の文学を否定し、『我が懺悔』(一八八四)の宗教家へ思想的な転換を遂げた晩年のトルストイについて、道徳アレグリの反撥を隠すことができなかった。トルストイの『モーパッサン論』(一八九四)は、明治三十年代から藤村が愛読した論文であるが、「トルストイの『モーパッサン論』を読む」(『早稲田文学』大10・9―11)で回顧しているように、『女の一生』を絶賛したのを例外として、それ以降のモーパッサンの文学について、道徳との健全な関係を混濁させたと切り捨て、道学者的批評に辟易

せざるを得なかったのである。『クロイツェル・ソナタ』は、終始「肉欲」を蛇蝎のように罪悪視する声高な糾弾がお題目的に先行している。トルストイが説いた解決法は、『家』において結婚を精神と肉体の関係から問い直そうとする藤村の批評的意図を鮮明にする効用はあったであろう。しかし、『クロイツェル・ソナタ』の「あとがき」に述べられているような禁欲と純潔を至上の美德と見なす教化的意図に無条件に服していたとは到底考えられない。藤村に感銘が残ったとすれば、それは結婚生活の欺瞞に満ちた生態を苛烈に抉り、頑迷な宗教家を思わせない表現の迫力に脱帽せざるを得なかったことになる。木村は前掲文において、翌年の「二月の了らうとする頃」藤村宅を訪ねた時、第一短編集『緑葉集』（春陽堂 明40・1）が読みかけたまま伏せられていたと証言している。読みかけていた箇所は、同集に収録されている「水彩画家」（『新小説』明37・1）であろう。『家』上巻五章には、「水彩画家」を下敷きにして、妻の交遊関係に対して嫉妬する小泉三吉が描かれているからである。夫が妻に嫉妬するという男女の葛藤が、当初から予定されていた構想であったことは動かない。『クロイツェル・ソナタ』を読んだ藤村は、「嫉妬」に悶える夫の内面劇に多大な関心を煽られたと推測される。他方で、藤村は『クロイツェル・ソナタ』の妻が、来訪したピアニストに牽引される性心理的な情動の描写に手薄な感が否めないと感じていたのではない。『男性と女性』の内容を参照することによって、性愛の葛藤劇をより精緻に考察しようともくろんでいたであろう。

ところで、藤村がエリスの理論を駆使して、結婚した男女の危機を考察しようとしていたならば、第二次性徴の男女について生理的・心理的分析をおこなった『男性と女性』より、『性の心理学的研究』の第一巻『羞恥心の進化』、第三巻『性的衝動の分析』などを参照しようとする方

がはるかに有益であったであろう。そうすると、小説「家」の創作を開始する時点では、『性の心理学的研究』は未見であったのではないか。⁽¹⁵⁾『性の心理学的研究』との出会いは、前記加藤静子宛書簡に書かれているとおり、大正十四年まで繰り下げて考える方が適切であろう。

(二)

小説「家」の構想とエリスの『男性と女性』の関係については、別に稿を改めて考察する予定であるが、『男性と女性』と藤村との接点は、木村莊太の資料で明らかになった明治四十二年の暮れからいつ頃まで遡れるのであろうか。すでにわたしは藤村が性科学理論に関心を醸成する必然性があると述べたが、エリスとの接点が叙情詩時代に成立していたと強弁したいわけではない。しかし、性科学理論と邂逅する蓋然性について、明治三十年代の相当早い時期、具体的には詩を棄てて散文への移行を模索し、多岐に互る西洋の文学・思想の貪婪な吸収が行われた雌伏の時代にまで遡って検討する必要があると思われる。

以下、その理由をあらかじめ簡単に述べる。藤村が『男性と女性』を読んでいた時期に先立つ三年前、明治三十九年十月、雑誌「新古文林」に談話「女は如何なるハヅミにて墮落するか」への回答⁽¹⁶⁾が掲載されている。これは談話筆記であるから、その資料的価値について疑義を挟む向きもあろう。掲載談話の不備に拘泥し、しばしば修正の労を厭わなかった藤村であるが、この談話についてはそのような込み入った事情はない。さらに、「新古文林」に掲載された談話は、その後全文ではないが、翌明治四十年五月の雑誌「婦人画報」に「婦人の墮落に就いて」と改題されて再掲載されている。以上のことを総合すると、この談話から藤村

の見解を付托することも許されるであろう。これは、従来一部の研究者が、短編集『緑葉集』所収作品の創作モメントを解説した自注として引き合いに出す程度で、比較的軽視されてきた資料である。私が注目したのは、藤村がこの談話において「ある心理学者」の説を引用し、女性の奔放な性愛行動の原因を、「月経」時の「過度な性欲」と「頭脳」の「変調」から説明しようとしていることである。そして、墮落の諸要因を解説した談話の趣旨と創作のモチーフ上に強い関連性が認められる『緑葉集』に、小説「老嬢」(『太陽』明36・6)が収録されていることである。藤村は、「老嬢」において、平凡な結婚に背を向け、あえて厳しい自立を選択する主人公夏子の煩悶を、身心に変調をきたす月経時の生理的条件下に追究しているのである。主人公の狂気を父親譲りの「遺伝」に関連付ける小説「老嬢」は、従来藤村が花袋の『重右衛門の最後』(新声社 明35・5)永井荷風の『地獄の花』(金港堂 明35・7)等と同様に、新しく興ったゾライズムの洗礼を受けていたことを証明する小説として理解されている。しかし、小説「老嬢」が他のゾライズム作家と異なる独自の問題的作品である所以は、月経時における過度な性欲や身心の変調を指摘した「ある心理学者」の説を応用した実作であったと考えられることであろう。このことについては後述するが、藤村が匿名化した「ある心理学者」とはエリスを指し、その理論的典拠は『男性と女性』の第十一章にあったと思われる。

習作期の創作を集めた『緑葉集』が、女性の純潔への疑惑、女性の肉体・生理について追究した作品を含んでいることは言い古されている。瀬沼茂樹氏は前掲書において、これらの創作モメントは、かつて妻冬子と実家の使用人との両親の認める間柄であり、結婚後も両者の間で文通が続いていたことに藤村が衝撃を受け、妻への疑惑を拭いきれずに不信

感を内攻させていたことに胚胎すると指摘している。しかし、このような夫婦間の感情の軋轢が要因となって、女性の心理・生理に探索のメスが入れられたとする解釈は、動機的一端を説明したにすぎまい。論点を妻への不信や嫉妬の感情に限定しているかぎり、異様な熱意で遂行された西洋の思想・文学書を渉猟する理由について得心の行く説明を行うことは出来ない。

第四詩文集『落梅集』(春陽堂 明34・8)以後、藤村が敢然と詩作の筆を折り、散文への転換を根底あるものにするために、欧米の文学・思想の摂取に没頭したことも周知のことである。『千曲川のスケッチ』奥書(『定本版藤村文庫』第三篇 昭11・4)や、明治三十四年英語の個人教授を授けられた長野師範卒の会津常治の回想(注)によって、この時期ダーウィンの他、イギリスの応用心理学者サリ、イタリアの犯罪心理学者ロンブゾ等、人間の科学的研究に裨益する実証科学の著作に関心が高まっていたことが明らかである。即ち、上記『千曲川のスケッチ』奥書によると、藤村はダーウィンの『種の起原』や『人間と動物の表情』のひたむきな「自然研究の精神」に瞠目しており、さらには「心理学者サレエの児童研究にも動かされた。」と回顧している(注)。一見、小説家として一日の長のあった先行者花袋に遅れをとるまいとして、必死に追隨していたかのように見なされる小諸時代の読書傾向は、狭義の文学の範疇を越えて多岐に亘り、実証科学の成果に学ぼうとする激しい志向性を示していたのである。以上述べたことから、果敢な「自然研究の精神」に倣おうとする延長線上に、エリスの著作にまで触手を伸ばすことになったと考えても不自然ではないであろう。

一八九四年に刊行された『男性と女性』は、男性と女性の生理学的・心理学的相連を論じて、男女の社会的な平等化が進んでも消えない性的

差異を第二次性徴から探究している。エリスを性差心理学の先駆者の一人に位置づけることになった業績である。『性の心理』第一巻『羞恥心の進化』の「序」において、「性の心理の主要な部分である性的本能の分析にとって必要な『序論』である」(佐藤晴夫訳『性の心理 第一巻 羞恥心の進化』(未知谷 一九九六・一〇)と自ら位置づけた『男性と女性』に続いて、エリスは『性の心理学的研究』を刊行しようとするが、ヴィクトリア朝時代の保守的な性道徳を規範視する社会から激しく忌避され発禁処分の弾圧をうける。しかし、それに屈することなく性の心理について独力で研究を続け、膨大なケース・ヒストリーを集大成した百科全書的大著『性の心理学的研究』全六巻を完成させたことは周知のことである。なお、「性的周期性の現象」の論文を収録する第一巻『羞恥心の進化』は、一九〇一年に米國フィラデルフィアのデーヴィス社から刊行された版によって広く流布することとなった。「老嬢」の脱稿時期は、明治三十六年三月三十日の花袋宛書簡に「御約束のものも脱稿致候。」と通知していることで確定している。「老嬢」の成立時期から考えて、それ以前に『羞恥心の進化』を入手し、目を通した可能性はないであろう。

(三)

実証科学の「自然研究の精神」に強い感化を受けていた時期に、「老嬢」という作品が発表されている。これは、未婚のまま教師を続けている二人の(「老嬢」が、女の幸福を求めるために選択した対照的な人生の行方を描いた短編小説である。社会が女性に押しつけようとする束縛に抗い、自由に生きようとするヒロイン夏子と、結婚という規範に従おうとする友人関子とが、信州田沢の温泉宿で互いの未来を試そうと話すと

ころから始まる。全三章の短編である。「老嬢」の作品構造を眺めてみると、夏子の運命の岐路は、婚約の成った関子の選択を否定し、孤絶の中の自由を選んだ第二章で完成している。第三章の五年後の私生児の出産、それに続くエピソードの狂女となる悲劇は、男性不信と不合理な社会への反抗に生きた必然的な帰結になっている。要するに、未来の破局を予測できずに、重大な自己決定を前にして懊悩する夏子の内面を描いた第二章の温泉場の場面は、主人公のその後の運命を暗示する一編の山場なのである。そして、第二章には「新しい女」を自負する夏子の苦悩が、新旧思想の対立の枠組みに収まりきれない条件に起因していることが、以下のように明示されている。

夏子は独りで升屋の二階の南廊下をあちこちと歩きました。丁度、合歡の花ざかりで、この廊下を美しく見せる。欄近く垂れる花の氣息は、蒼ざめた夏子の顔に香ひかゝるのでした。夏子は目を細くして、それを嗅いでみると、急にあの若い画家のことを思出した。(中略)それからそれへと記憶を辿つて見れば、楽しい思想が来て何時の間にか夏子の胸に宿りましたのです。

草木は熱の為に蒸され、人は情の為に燃えました。三上から届いた手紙には、其日、田沢へ尋ねて来るとある。丁度、夏子も見るとのを見る頃、やみがたい肉身の懊悩に追はれて、何につけても忍耐力がない。まして斯ういふ時に人を待つのは堪へがたいのです。

これは、舞台の花道に似通った廊下を行き来しながら苦悩する夏子を、前面に押し出した一編の最も重要な場面である。では、夏子の「忍耐力がない」心理状態を現出させた原因は何なのか。それは、関子に負って表明した前途への不安感や、画家三上への恋情が募っているためだけではない。傍線部の表現に示されているように、夏子の「懊悩」を

誘発した主たる要因は、月経期に特有な身体的不調であり、しかも、性的な情動が抑制したい昂進状態のためであったことが明らかである。新しい個人の意識を自負する知的女性の内面を、生理的条件を加味して鮮明に描写しようとする野心的作意が瞭然としている。以下『男性と女性』からの引用は、3rd edition, 1899. Walter Scott, Limited, London. を使用した。一九〇四年の改訂・増補四版の本文と比べると、注記の箇所を中心に加筆が行われており異同は大きい。藤村が読んだのが初版・改訂版のいずれであったかははっきりしない。しかし、具体的な典拠箇所として検討する第十一章において異同は見られないので、増補・改訂の問題は考慮しなくてもよい。「老嬢」第二章の月経時の性的な欲求の高まりは、『男性と女性』の「The highest points of activity in the sexual organs also correspond to the general maximum, and in most healthy women the sexual emotions are strongest at the maximum before the period, and at the lesser maximum after it. (P. 250)」を踏まえた表現であろう。そして、焦燥感を統制しがたくさせている精神状態は、'There is increased nervous tension and greater muscular excitability; (P. 252)」を使った表現であろう。その他、第十一章において、ヒステリー的な情緒の不安定を指摘した箇所も関連があるろう。なお、小説「水彩画家」に登場する柳沢清乃が音楽家の悩みと孤独に無理解な医者診断について「女の病氣と言へば——直に歇私的里。あゝ、医者に私の病氣が解る位なら、ヴァイオリンを抱いて泣いて居やしません。」(七)と冷笑する件も、第十一章との関連から検討する余地がある。

ところで、藤村が温泉宿の二階で苦悩する夏子の肖像を重視していたことは、次のような事柄からも納得されよう。「老嬢」の発表から約四年

後に刊行された短編集『緑葉集』には、「水彩画家」と「老嬢」の口絵が二葉挿入されている。「水彩画家」の場合、巻頭を飾った集中第一の力作であり、これを短編集の挿絵にしたのは当然の措置として了解できる。「老嬢」は、第二番目に配列された「朝飯」(芸苑)明39・1)の次に置かれていたので、特に「老嬢」を選んで口絵にしなければならぬ積極的な理由があったはずである。『島崎藤村全集』第九卷(新潮社 昭24・2)『新潮日本文学アルバム 4 島崎藤村』(新潮社 一九八四・八)には、小説「老嬢」の挿絵を依頼するために、藤村自ら私製原稿紙の裏に下絵を書き、それに彩色を施した「参考図意」が紹介されている。挿絵の制作を依頼することになった経緯については、画家鏑木清方の回想「島崎さんの挿絵をかいいた頃のこと」(『藤村研究』第三号、『島崎藤村全集』第九卷付録、新潮社 昭24・1)に詳しい。明治三十九年七月二日付神津猛宛書簡によると、『緑葉集』の出版社が春陽堂に決定しており、近々校正に取り掛かる予定と告げ、同年八月一五日付神津猛宛書簡によると、すでに校正に着手し、出版が翌年の正月に決定したことを通知している。鏑木清方に挿絵を頼んだのは、版元との契約が成立した七月の初めであろう。

藤村が自ら筆を取った下絵は、夏子が温泉宿の二階の手すりに寄りながら、両の腕を胸元に押し当てて立ち尽くしている姿である。下絵を自ら書くことも異例であるが、「参考図意」には鏑木に注意事項を克明に指示した文面が書き込まれている。その文面に、「丁度合歡樹の花ざかりで是廊下をうつくしく見せる、夏子は目を細くして、その香を嗅いで見ると——」という「老嬢」第二章の前掲引用文の波線部に該当する本文を書き込み、場面の説明を行っている。参考の下絵に書きこまれた原文と指示の内容は小説「老嬢」の主題をいかなる場面に焦点化しようとして

いたかを示唆していると理解して差し支えあるまい。鏑木への指示の文面には「若葉と花の香を呼吸し、青春の衰へたるを嘆く——」というコメントが書かれており、過ぎ行く「青春の衰頹」(二章)を意識し、悲嘆に暮れる夏子の姿を挿絵によって印象づけようとしていたのかもしれない。しかし、挿絵の視覚的映像が挿入されることによって、「老嬢」第二章の本文が読者に強調されることになるのも動かしがたい。そうすると、挿絵の構図には、単に「青春の衰頹」を寓意させたに止まるまい。藤村は、鏑木にあからさまな指示は出さなかったが、月経時の肉体と精神の変調に苦しむ場面を意識して、つまり、夏子を内部から突き動かす性欲の昂りと精神の焦燥状態を明示したという本文理解に立って口絵の制作を頼んでいたと考えてよからう。

ところで、藤村は明治三十六年四月二十七日付の画家三宅克己に宛てた書簡で、「老嬢」の創作動機を次のように説明している。「広き意味にいていふ天真なる自然は偽多き人間の生涯にも明かに顕はれ居るの考にて、其一端をすこし写し試みたるものに候」。この「自然」の語句には、「草木は熱の為に蒸され、人は情の為に燃えました。」(一章)という夏子の内部にたぎる情動と盛夏の暑熱を、「自然」という語句によって一体化させる視点で描いた件や、夏子の月経期の身心の変調を描いた箇所が含まれる。しかし、その意味内容はいま少し多義的である。夏子の狂気を暗示するために、端役の男が夏子の境遇と実父の悲劇的運命を「統を引く」(三章)と噂し、それに応じて関子が、父親の運命に重ねて夏子の孤独癖について、遺伝・狂気によって因果論的に関連付ける箇所には、ゾライズムの発想が露骨に導入されている。結局のところ、「自然研究の精神」に感化された小説「老嬢」は、ゾライズム的な方法とエリスの理論を実証科学の所産として積極的に応用した試験的な創作であったので

ある。

小説「老嬢」は夏子の煩悶を新旧思想の対立に還元せずに、生理的條件を打ち出したところに新味がないわけではない。しかし、奔放な男性遍歴や、私生児を産み狂気に直面する結末は、エリスの性心理の理論とゾライズムによって理屈潰けにされている。一見能動的に生きようとしたかに見える夏子は、自由を奪われた決定論の傀儡に等しいのである。その後、『破戒』(緑蔭叢書第一篇 明39・3)に結実していく「目覚めた者の悲しみ」という藤村文学の基調的テーマは、「老嬢」では性心理理論やゾライズム的方法の強調によって自律的展開を阻まれていたのである。『破戒』後の談話「自然派と非自然派」(『文章世界』明41・3)において、ゾラの人間解釈を「単純」であると退け、決定論的思考との訣別宣言が行われるのは必至であったのである。

(四)

ところで、雑誌「新古文林」に掲載された談話「『女は如何なるハヅミにて墮落するか』への回答」は、藤村が日露戦後の騒然とした時代状況についてどのような認識の持ち主であったかを窺うに足る資料としても興味深い。明治三十九年六月九日、牧野文相の「学生の思想風紀取締に関する訓示」が発令され、これを契機として個人主義的な思想傾向を顕著にしていた青年の現状について、識者のあいだで憂慮する声や擁護する論調が交錯し、論議が白熱した。新聞紙等の報道は、大衆の卑俗な好奇心に迎合し、女学生の醜聞を殊更に煽情的に伝える様相さえ呈していたのである。世情の動向を察知した「新古文林」の主催者国木田独歩は、時宜に適った特集を組もうともくろんで、明治三十九年九月三日付吉江

喬松宛書簡で広く識者から意見を聴取するよう督促していたのである。藤村が「新古文林」の記者の取材を受けたのは九月の早々の頃であろう。

この談話の中で、厳格な家庭の中で育ち、絶えず束縛を感じているために、反動的に自由を求めて親の意見とは正反對な極端な生涯に逸脱していくケースを説いている。これは、「名譽心」(三章)に執心する気位の高い母親の意向に反抗し、自由を実現しようとして失敗した夏子の挫折に符合しているのである。その他、小説「旧主人」(「新小説」明35・11)「爺」(「小天地」明36・1)のヒロインの境遇と、この談話の趣旨には相關関係が認められる。女性の墮落の種々相に言及した談話は、『緑葉集』所収作品の内容を借用し敷衍したものであったのである。記者の取材に応じた九月と言えば、すでに「老嬢」の挿絵の制作は鐫木に依頼済であり、『緑葉集』の刊行に備えて校正に着手していた時期である。その後、九月早々に「新古文林」の記者に語った談話の中で、「ある心理学者」の説を紹介する。これら一連の流れを総合的に見ると、藤村が小説「老嬢」の創作モチーフに強くこだわっていたことが瞭然とするのである。

藤村は、多くの女性が因習的な性観念に規制され、羞恥心から自由でなかったにもかかわらず、奔放な本能的行動に逸脱するには、様々な要因が想定されると考えている。縷々要因を挙げたうえで、最後に次のような注目すべき発言をしている。「墮落の原因として、最後に私は過度な性欲を挙げませう。ある心理学者に言はせると、女子と月経との関係は大なる問題で、女子の頭脳が変調を来たすのも深い原因はそこに在ると論じました。」「ある心理学者」と匿名化した言い方には、問題を離化しようとする躊躇の意識が働いたとも解釈される。しかし、『破戒』刊行後の文学界が、一切の道徳的規範に果敢な否定精神を投げかけ、逆行を許さない革新潮流を確実にしていた時期であることに留意すると、読者の

反応を気に病むような大胆な意見の表明でもなからう。問題は、夏子の煩悶を性心理的知見を応用して解剖しようとした小説「老嬢」の三年後に、藤村が「ある心理学者」の見解に依拠しながら、女子の「月経」と性欲の昂進が深い関連性を持っていることに注意を喚起したことである。しかも、それが墮落に転落する誘因となり得る場合があり、生理的周期性によって起こる「月経」時の女性が精神的な「変調」を惹起し易くなることも、墮落問題の背景として注意しておかなければならないと発言していることである。これが、エリスの『男性と女性』の第十一章の内容を踏まえた発言であったことはすでに述べたとおりである。

上記の談話において、性心理の学説を提示した真意を、文脈に即して整理しなおしておく。墮落の諸要因を社会の風紀の弛緩や、女性の境遇・性情等に互って網羅し、条理を尽くした克明な述べ方は、藤村がセンセーショナルな興味本位の論議を是正したいと考えていたことを物語っている。そして、複雑に錯綜する要因に加えて、最後にまったく観点を異にする性心理学的な理由付けを提示したのは、女学生の風紀の頹廃を旧来の道徳観念から裁いて事足りるとする短兵急な論議では、真相を見誤ると主張したかったためと解釈できる。同時に、急いで付言しておきたいことは、実作へ理論をあざとく適用した「老嬢」と、この談話の「ある心理学者」の説の紹介の仕方は明らかに異なっているのである。性心理の学説を女性の墮落の一つの要因に付加する論理構成は、性科学理論を絶対視する祖述家ではなかったことを示しているよう。女性の墮落問題を性科学理論の信奉によって見通せると考える偏頗な発想から脱却していたことを意味する。そして、墮落の局面は視点を転換すれば、新しい道徳の曙光さえ見出される場合もあるという判断さえ根底に確保されている。『破戒』刊行後のこの談話には、「目覚めた者の悲しみ」とい

う基調的な発想が、女性の墮落問題をめぐって顕著に感得出来るのである。花袋が、ほぼ同時期の「隣室」(『新古文林』明40・1)「ネギ一束」(『中央公論』明40・6)から「一兵卒」(『早稲田文学』明41・1)において、生理的条件を前面に押し立てて、人間を支配する「畏」のような決定的要因にまで過激化していく見解とは、明らかに一線を画すことが出来るのである。

現在、西洋の性科学の思想について、社会学的視点からの歴史的相対化が進んでいる。その結果、性科学が人間の意識を支配するイデオロギーとして働き、男女を規制する社会的秩序との相応関係の中で、理論的変容を重ねていったことが鋭く浮き彫りにされている。藤村は当初、資料に基づき生理的・心理的考察を行ったエリスの研究を、実証科学の成果として受容していたはずであるから、このような明快な歴史的定位が可能であったはずもない。しかし、性的差異が男性と女性を社会的役割に固定化することについて考察する契機になったという観点は、大事な検討事項になるのではないか。例えば、ローレンス・バーキンの『性科学の誕生』(十月社 一九九七・一一)は、Z・フーコー、J・ウィークス等のセクシュアルティの社会学的な研究成果を踏まえ、性科学の歴史的区分をより精密にしながら検討を試みている。これによると、バーキンは『男性と女性』の第一章の末尾の文章を引用し、次のように説いている。「つまりエリスは、明らかに二つの傾向に気づいていた。一つは性的分化(『差異化』)に向かう『非常に顕著な傾向』であり、もう一つは性的民主化に向かう新しい『逆の傾向』である。前者の流れは、およそ一七五〇年から一八八〇年にかけての時期に西洋中産階級で起こった男性行為領域と女性行為領域とのイデオロギー的な、そしてある点では文化上の差異化(『分化』)につながり、また後者の流れは、十九世紀最後の

数十年間でのそのような領域区分の崩壊につながっている。」ここにおいて、エリスは領域区分の解体は行き過ぎであるとして、負の烙印を押そうとした人物であると規定されている。バーキンは、エリスをより大きな変異に進んでいる男性と、そうではない女性との非対称的な性的差異を理論化し、性的階層秩序を再設定せんとした性科学者の典型であるとまで評している。エリスの性科学は、人為的差異の崩壊の防波堤として新たな差異の定立へ向かったのである。

しかし、問題とすべきことは、エリスの性科学が性の解放を拡大させたという一般的な肯定的評価につながるが、『世界性学全集1 性の心理学的研究』(河出書房 一九五六・九)の「解説」で、青木尚雄がエリスの『男性と女性』は、性を巡る「社会問題と対決する文明批評である」と強調している捉え方と、藤村との関連性が想定されなければならない。『男性と女性』の第一章で、十九世紀の西洋の人為的性的分化の解消を、女性の社会的進出と地位を上昇させる必然的傾向であると捉えているエリスの見解は、明治四十年代、藤村が近代化を急ぐ日本社会の弊風に挙げた女性を取りまく牢固とした現状を打開することについて示唆を与えたのではないか。なぜならば、感想集『新片町より』(左久良書房明42・9)に収められたエッセイ「女子と修養」をみるまでもなく、藤村は西洋との思想的・文化的落差を意識しながら、近代化を急ぐ日本の現状に鑑みて、女子の自立した意識の確立が急務であると説いて止まなかった人であったからである。

前掲の「女子と修養」に説かれている藤村の女性問題についての認識を持ち出すまでもなく、日露戦争後に旧来の思想・道徳規範に動揺が生じたにもかかわらず、女性を取り巻く時代状況は、旧態依然とした家族制度、男尊女卑の結婚生活等の難題が払拭されていなかった。「女子と修

養」には、当面する改革の時代において、その任は男性だけに委ねられるべきではなく、女性も同様の気概を持つよう自覚を促している。このような提言の中には、社会問題の構成単位である両性問題が批評すべき課題として意識化されていたであろう。それは、日露戦後の当面する諸問題を列挙し、その根底に迫る論議の必要性を説いたエッセイ「批評」(新潮)明42・3)の明確な時代批評的問題意識と結合して、後年、イブセンを通して十九世紀北欧の宗教・思想・階級・性の問題を論じたブランドスの「イブセン論」に多大な感銘を隠そうとしないエッセイ「四つの問題」等の文明批評的な問題提起に滑らかに発展していく重要な萌芽が認められるのである。

今後の課題は、エリスの『男性と女性』と小説『家』との関連について探究するだけでなく、大正期のエッセイ「婦人の目覚め」(『女性日本人』大10・6、「早稲田文学」大11・3)「四つの問題」と関係づけながら考察することが必要であろう。

注

1. “Man and Woman”と『家』の関連性に逸早く言及したのは、越智治雄「藤村に関する新資料」(『日本文学』昭31・3)であろう。その後、瀬沼茂樹『評伝島崎藤村』(筑摩書房 昭56・10)も、小説『家』が同書から「暗示」を受けているであろうと推測している。
2. 宇田川昭子「藤村未発表書簡」(『島崎藤村研究』16、昭63・8)が指摘しているとおり、本書簡を大正十三年としている筑摩書房版全集は誤りである。
3. 島崎静子は、藤村から受けた読書指導について次のように回想している。「カアペンター著『愛と死の戯曲』もあった。これについで

てエリスの論文の一部もあった。(中略)セックスに関した本は、もっと限定されて先生がラインを引いた箇所だけを読めと言われる時もあった。」

4. 「漱石山房蔵書目録」(岩波書店版『漱石全集第16巻別冊』、昭42・4)によると、漱石は『性の心理学的研究』第一、三巻を所持していた。明治四十二年八月十六日付畔柳都太郎宛書簡に読後感が述べられている。

5. 笹淵友一「小説家島崎藤村」(明治書院 平2・1)小林一郎「島崎藤村研究」(教育出版センター 昭61・9)は、『家』と『性の心理学的研究』との関連性に言及している。しかし、わたくしは『家』の時点で藤村が同書を読んでいたかどうかについては疑問を持っている。

6. 「婦人画報」(明40・5)に掲載された談話「婦人の墮落に就いて」は、「新古文林」に発表された文章の部分的掲載である。本文に些少の違いがあるが、ほぼ同文とみなしてよい。なお、引用の箇所は「婦人画報」では消失している表現である。これは、エリスを全面的に否定する判断にいたったため抹消されたのではなく、紙数の関係でカットされたのであろう。

7. 会津常治「小諸時代の島崎先生」(『藤村研究』第十七号、新潮社版『島崎藤村全集』第十九巻付録、昭26・10)によると、明治三十四年の夏季休暇中、藤村宅で英語の個人教授を受けられた会津は、同年九月頃藤村から長野師範所蔵の『シンキング・フイリング・アンド・ドゥイング』といふ心理学書を借り出して「貰うよう依頼を受け、早速郵送したと述べている。上記の心理学書は、E.W. Scripture “Thinking, Feeling, Doing” (1897) を指しているであろう。

8. 渡欧時代の通信記事「人形芝居」(東京朝日新聞)大4・8・28(30)で「私は曾てある心理学者が人形に対する子供の愛着心に就いて書いたのを読んだことが有ります。斯ういふ人形芝居の前に常に五六十人の少年の見物を集めるのも不思議は無いと思ひました。」と回想している。これは、サリの“Studies of Childhood”(一八九五年)の第二章“The Age of Imagination”の内容を踏まえた表現である。『千曲川のスケッチ』奥書で「サレエ」に言及した文面は、額面通り受けとって間違いないであろう。

9. 三宅克己宛書簡は全集未収録であるが、赤羽学「島崎藤村の明治三十年代の風景描写の契機——三宅克己宛書簡二通の紹介を兼ねて——」(『書簡研究』1、昭63・10)に紹介されたものによる。

付記 エリスに関する文献については、九州龍谷短期大学教授江頭太助氏から多くの御教示をいただいた。氏の学恩に深謝申し上げる次第である。